

奈良県立大学学術研究員 研究成果報告書

研究課題（和文）：

移行期正義と芸術活動ーインドネシアにおける独立系映画製作に焦点をあてて

研究課題（英文）：

Transitional Justice and Art Activities: Focusing on Independent Filmmaking Processes in Indonesia

研究代表者名：亀山恵理子

学術研究員名（所属先）：鈴木隆史（桃山学院大学）

1. 本研究の概略

本研究の目的は、インドネシアの移行期正義において独立系映画制作が果たしうる役割について考察することである。ここでいう移行期正義とは、国家権力による過去の負の遺産に向き合い清算することである。本研究では、映画制作関係者や暴力の被害者への聞き取りを行い、とくに映画や映像作品の制作過程が被害者の立場にある人々にどのような影響をもたらしたのかを明らかにする。

2. 本研究の内容

本研究では、具体的に以下の映画・映像作品制作過程を研究の対象とした。ひとつは、インドネシア占領下（1975年～1999年）の東ティモールにおける女性の紛争経験を描いた映画の制作と上映である。インドネシアのカミラ・アンディニ監督によって2016年に発表された『メモリア』はインドネシア占領下における性暴力の記憶を描いた作品である。もう一つは、日本占領下（1942年～1945年）のインドネシア

（当時はオランダ領東インド）において慰安婦とされた女性の経験とその後の人生を聞き取り、文字と映像で記録する活動である。これは、鈴木共同研究員が2013年から継続してきたものである。

2019年度には現地調査を実施した。6月に東ティモールで映画『メモリア』の制作に協力した東ティモールの現地NGO関係者への聞き取り、9月にはインドネシアでカミラ・アンディニ監督への聞き取りを行った。また、同じく9月には鈴木氏がイン

ドネシアのスラウェシ島で、日本占領期における女性の性暴力被害と正義の実現に向けた取り組みに関する聞き取りと撮影を行った。

2020年度には、暴力の被害者への聞き取りを継続することで映画・映像作品制作と被害者の関係についてさらに知見を得たいと考えていた。だが、新型コロナウイルス感染症の広がりにより渡航の見通しが立てられない状況が続いた。そのため本研究は2020年度で一旦終了することとした。

3. 本研究で明らかにしたこと

上述のとおり、十分な現地調査が行えたわけではないが、これまでに得られた知見から次のことがいえる。

一つ目に、移行期正義がなかなか進まない状況下において、独立系の映画・映像作品制作は暴力の経験とともに被害者の立場に置かれた人がいかにその後を生きたのかを記録する場となっている。二つ目に、そのような場となっている制作過程は、制作に関係する人々の中に変化を生み出す可能性がある。被害者の立場にある人の気持ちの変化のみならず、歴史的には加害の立場におかれた制作者が自らの痛みに向き合う過程での変化、作品の制作をきっかけとした地域社会の人々が被害者へ向けるまなざしの変化など、複数の変化が起こりうる。移行期正義に進展が見られないなか、独立系の映画、映像作品制作は、暴力の被害者の経験と感情を作品ごとの世界観で表現し、社会に働きかけている。

4. 本研究の諸成果

〔セミナー、シンポジウム等〕

亀山恵理子（2021）『『過去の問題』に向き合うー映画『メモリア』に描かれた紛争経験の記憶』東ティモールフェスタ2021（オンライン講演、2021年7月4日）。

鈴木隆史（2021）「インドネシア、南スラウェシ州の日本軍性奴隷制被害者の声に耳を傾けて」奈良県立大学「地域研究の方法」（ゲスト講義、2021年7月22日）。

〔図書〕

なし

〔雑誌論文〕

なし

〔学会発表〕

なし

〔その他〕

亀山恵理子（2021）「性暴力の記憶を描いた作品『メモリア』－カミラ・アンディニさんインタビュー」『季刊東ティモール』第79号、20-23頁.

5. 外部資金（科研費を含む）事業への申請予定等の今後の展開について

現在はこれまでに得られた知見をもとに、研究の目的に照らした考察をすすめている。最終的な研究成果は今後本学研究季報などに発表する予定である。

以上